

たられればちゃんぷるー

大松 達知

ドアチャイムは日本では「ピンポン」と鳴り、アメリカでは「デインドン」と鳴る。というわけではない。そう聞いているだけだ。だから、娘にうぐいすはホーホケキョと鳴く、と教えてしまうことには罪悪感がある。お前もこの社会の通念に絡め取られて生きるのだぞ、という諦念や盲従を刷り込んでるように思うのだ。

さて、「たられれば」は広辞苑にも〈俗語〉として採取されている語。

ため込んだ悲しみ不良少年のバイクが「タラレバタラレバ」と鳴く 近江瞬『飛び散れ、水たち』

クラクション音の「聞きなし」が秀逸。滑稽なほどやるせないその音に落ち着きのない俗語を当てる。彼らのもやもやの多い人生に悲しみを見出した。(さすが、のちに地元石巻の新聞記者になる作者だ。)その鳴らす音階が伝統を受け継いでいるのも悲しい。規範的生活に反する世界に憧れながらも、規範に従う矛盾でもある。

試験管のアルミの蓋をぶちまけて じゃん・ばるじゃん
と洗う週末 永田紅『ぼんやりしているうちに』

下の句の人名から、「レ・ミゼラブル」のストーリーとのつながりを想う。ただここでは深入りせずに人生はいろいろあるなあという雰囲気を掴めればよいだろう。近江作品はいわゆる〈聞きなし〉。フクロウの声を五郎助奉公と聞くタイプのもの。永田作品にあるのは〈有意のオノマトペ〉ということになるかもしれない。

ぜらにゆーむ時おり永の別れかな

池田澄子『此処』

花の名の音感が効果的。ゼラニウムと表記することが多いが、ここではゼラニウム、さらに平仮名でねっとりとした語感を強調しているようだ。葉の厚みや妖艶な花の姿、特徴的な香りと死も通じる。名詞によるオノマトペ風の用法と言えるだろう。繊細な感覚だ。

ごーやーちゃんぷるーときどき人が泣く 同

これもその仲間に入りたい。チャンブルーは沖繩の言葉で「ごちゃませ」。感情が絡み合ってごちゃごちゃになっている場面と、種々の匂いと味の混ざったその料理が合う。もちろん実景としてもいい。ごーやーちゃん／ぷるーときどき、と読んでその境目に音としての滑稽さと悲しさを感じた。オノマトペの究極の形は、既存の言葉の音の中に感情を見出すことかもしれない。